

〔論文〕

乳児保育における指導法

—「相補的な関係」からの検討—

大 方 美 香
Mika Oogata

大阪総合保育大学
児童保育学部

乳児保育（ここでは保育現場における呼称としての3歳未満として位置づける）における指導法は、大人からの働きかけか子ども主体かの二項対立となりがちである。ここでは、大人と子どもが対立的関係ではなく相補う関係であるという相補的概念を位置づける。例えば、「物をつかむ」という原初的な活動の場合では、子どもが握れる範囲に物がなければ、つかむ行為そのものがなくなるという関係がある。一方、大人の「ガラガラを振る」という行為が子どもの注視を促す。「環境を通して」と言われるが、大人のこうした補いから、子どもの「物をつかむ」という行為が成立するようになる。これを「相補的な関係」とよび、乳児保育の土台として位置づける。本研究の結論は、児童中心主義と系統主義といった保育の考え方の相違ともいえる。しかしながら、子どもの生活活動・遊び活動における大人の関わり方の違いであること、「育てると育ちの融合」という視点から具体的な指導計画論を通して明らかにする。

キーワード：乳児保育、指導法、相補的な関係、育てると育ちの融合

はじめに

乳児保育（ここでは保育現場における呼称としての3歳未満として位置づける）における指導法は、大人からの働きかけか子ども主体かの二項対立となりがちである。ここでは、大人と子どもが対立的関係ではなく相補う関係であるという「相補的な関係」を位置づける。保育の指導法は、援助か指導かがすべてではない。環境を通しての教育を提起されて以来、保育の指導法は、援助か指導かを議論する風土が生まれている。つまり、大人主導なのか子ども主導なのかという議論にもつながっている。保育は、大人（保護者）と子どもがいてはじめて保育が成立し、どちらかという問題ではない。技能の習得の際には大人が導くことも必要であり、生活の場面においては子ども主体が望ましい。場面や活動の内容、保育の目的・ねらいなどに応じて援助か指導のどちらが適切かを検討しなければいけないと考える。ここでは、保育者が「相補的な生活活動」を理解し、「相補的な生活活動の指導計画への反映」について検討を行う。また、「育てると育ちの融合」という視点から、具体的な指導計画への試論について検討することが目的である。

保育の指導法の枠組みの提案としては、保育をどのように位置づけるか・定義づけるかによって異なった視点があるが、次のことは共通理解として考えることとする。

- ・保育方法学の目的は保育実践をより妥当性の高いものとするために、保育実践を保育過程として理解し保育の過程における保育者の働きかけの妥当性を検討する。
- ・この目的のために、保育方法学が扱う対象は、保育の過程を対象とする。具体的には、時間的・空間的に特定された保育の過程である。
- ・保育の過程として想定されている中心は「子どもの活動」への保育者の関与である。その場合に子どもの活動としては生活活動と遊び活動の2つを想定する。なお、子どもの活動過程には「行為過程」と「関係過程」が含まれていると考える。すなわち、乳児保育における子どもの活動過程への保育者の関わり方・行動を対象とする。なお、子どもの活動過程には1) 行為過程と2) 関係過程が含まれていると考える。
- ・保育者の関わり方は、子ども理解、目標・ねらい、内容、保育者の関わり方、及び、保育評価の5つの要素全体を対象とする。
- ・保育者の働きかけをタイプとして理解しカテゴリーを作る。たとえば、保育者の働きかけには子どもの自主活動をどの程度重視するのか、子どもの自主性を尊重する関わりか保育者の積極的な働きかけを軸とするのかといった検討も可能である。
- ・保育者の働きかけは、子どもの活動の過程に即して2つの働きかけの内容を持つ。すなわち、子どもの「行為過程」への関わりと「関係過程」への関わりがある。

I 乳児保育の特質

乳児保育の特質をどう理解するかは、指導法を考える上でおさえておくべき事項である。これまで議論になったことを前提に考えると、「保育は教育か」、「保育と学校教育は同じ文脈で考えてよいのか。」等といった意見がある。他方、保育は家庭保育の延長であり、「子どもを預かればよい、託児である。子守りをしているだけである。」という意見がある。今日、3歳児以上の保育についてもまだ論点が整理されているとはいえないが、乳児保育はどのような視点で考えるのかが問われている。指導法において重要なことは、「活動」と「ねらい」の関係であり、この整理が必要といえる。乳児保育をどのように理解するかによって、保育内容編成及び指導法のあり方が変わる。

例えば、「乳児の歩く」を考えてみると、寝返りなどの身体コントロールから始まり、随意運動、高バイ運動を経てヨチヨチ歩きに発展していく。それは子どもの環境を通した生活における活動によるものともいえ、大筋肉を中核とする人としての発達の過程における「成熟」が生み出すともいえる。乳児保育において、保育者は具体的にどのように関わることが求められるのであろうか。ここでは、「乳児保育及び保育者の果たす役割とは何か」を通じて乳児保育の指導法を検討する。

1. 「狭い」教育概念の克服

乳児保育は、「狭い」教育概念を前提としていないだろうか。保育においては、「教育」について考えるとき、学校教育を典型としてきた可能性がある。学校教育は、確かに教科学習が中核ではあるが、それ以外にも生活指導が教科指導と並んで重要な活動がある。学校を離れて考えれば、青年期のスポーツや音楽表現活動、趣味の活動・レジャー活動など多様な活動があり、多くの学びがある。「教育」とは、学校教育だけではなく、むしろ、「活動」を通じた学びが重要といえる。保育、特に乳児保育は「保育における活動」を念頭において「教育」を考えなければならないといえる。

保育は一義的には「生活」の場であり、「生活・生活活動」を通して教育が行われていると考えることが重要である。特に乳児保育は「生きる活動の土台の全て」を包含しているのであり、「学習活動だけを教育とみなす世界」とは異なることを自覚する必要がある。重要なことは、教育という学校での学習活動を念頭において保育を考えると、早期教育や才能教育といった方向が追求されがちである。また、教育の側面を強調するがゆえに「設定保育」や「課業」等を軸にした保育内容編成と

なり、一方ではそれを否定すると「好きな遊びをする」ということに終始してしまいがちである。その結果、乳児保育における教育の視点が失われた保育内容編成となるなど、両極端な議論となりがちである。

実践的に考えてみると、保育は決して学校における学習活動ではない。むしろ、乳児保育は家庭生活の延長、家庭生活の意図的組織化といわれるように、家庭との類似性を持つと考えることは当然である。乳児保育は、大人である保育者と子どもの活動が出会うところに保育の方法論がある。したがって、子どもにとって乳児保育は、「生活の場、生活活動の場」であり、その生活が子どもにとって最適なものであり、楽しく豊かなものとなるような指導法であるべきと考える。保育は、特に、乳児保育は「生きる活動の土台の全て」を包含しているのであり、「教える」活動だけを教育とみなす世界とは異なることを自覚する必要がある。実践的には、ベビーシッターは教育かというときに学校のような教育をしていないので教育とは言わないと考えることもでき、逆に、大人が介在しているので何か教育が介在しているということもできる。子どもの生活が、保育・教育の土台であるという視点が必要である。基本的に子どもの生活のあるところ教育があり、意図的な教育に焦点がある場合は生活ではなく学習というべきである。つまりは、保育は最も生活に密着している教育だということが出来る。例えば、乳児保育の中心活動である、睡眠や食事活動であっても養護と教育の一体化と言われるように「生きる力」の獲得として、環境に適応していくための教育が発生していると捉えるべきである。

次に保育にとって重要なことは、子どもの主体性をどう位置づけるかである。乳児保育では、「子どもは自己活動・主体的活動を展開している」ことを念頭に指導法や保育内容編成を考える必要がある。幼児教育においても子どもの主体性をどう位置づけるかが課題となってきた。乳児保育においても「環境を通して」の保育が言われている。

乳児だからということで、子どもの自己決定や選択する行為を妨害するような指導法は、ヒトとしての尊厳（玉置、2008）を否定することとなる。保育所保育指針（2017）の改定により、乳児保育の実践は、子どもの自己活動や主体的活動を尊重するため、日案においては、ねらいを「させる」から「する」に改めるという配慮をしたり、「好きな遊びをする」といった保育内容に焦点をあてたり、「配慮・援助」といった言葉を使うなど創意工夫は行われてきている。しかしながら、子どもの「活動」と「子どもの育ち」の関係への視点、また保育者はどのように関わるのかといった指導法への視点が少

ないのではないだろうか。

2. 「大人からの働きかけ」か「子ども主体」かといった二項対立の克服

子どもの「活動」と「子どもの育ち」の関係への視点、また保育者はどのように関わるのかといった指導法への視点を考えるとき、前述したように、乳児保育（ここでは保育現場における呼称としての3歳未満として位置づける）における指導法は、大人からの働きかけか子ども主体かの二項対立となりがちである。むしろ、大人と子どもが対立的関係ではなく相補う関係であるという「相補的關係」が必要と考える。

乳児は母のぬくもりを胎内から引き継いでおり、胎外にでてからも当面は一体性という基本的な関係は継承していると考えることができる。すなわち、関係性という点では、子どもは「母体という他者」との関係性をすでに結んできたともいえる。もちろん、母性神話のように過去に戻るということではない。「乳児と大人の関係」は、「応答的關係」論のように、コミュニケーションのあり方に集約される傾向にあるが、ここで提案する「相補的關係」は、単にコミュニケーションのあり方を示すことではない。乳児保育における「子ども－保育者」の関係は、単なる出会いではない。子どもは、生活活動の全てを遂行するために、「保育者の存在を必要とする」事実を基盤とした検討が必要である。このことは、乳児保育における関係性の特徴であると考えられる。ここでは、「相補的關係」とよんでいるが、このことによって「子ども主体か保育者主体か」といった対立的な議論から解放されることが可能となる。すなわち、「相補的關係」とは、「子どもと大人との間で子どもは活動している」ということである。乳児保育で見受けられる活動としては、以下に示す「自己選択活動」、「対等な交流活動」、「存在・活動の支え活動」がある。

乳児保育におけるこれらの活動は、「子ども－保育者」という2つの関係性によってなりたつことから、指導法も「相補的關係」を基盤とすることを提起したい。

II 保育所保育指針（2017）における乳児保育の位置づけ

それでは、保育所保育指針（2017）では、どのように乳児保育の指導法について位置づけられているのだろうか。議論の前提は、年齢区分をどのように考えるのかがある。保育所保育指針（2017）は、「1歳まで」「1歳から3歳まで」「3歳以上」の3区分としている。3区分ごとに「保育の目標」などの方向を明示しており、これ

を念頭に整理する。

1. 乳児保育（1歳未満児）における保育者の関わり

保育所保育指針「第2章保育の内容」に、乳児保育、1歳以上3歳未満が位置づけられたことは画期的であり、乳児保育にも生活を基盤とした教育的視点が必要であることが示されたといえる。乳児保育（1歳未満児）において、以下に示すように、3つの視点に基づき、視点ごとに「ねらいと内容」及び、「内容の取り扱い」が記載されている。

「イ本項においては、この時期の発達の特徴を踏まえ、乳児保育の「ねらい」及び「内容」については、身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」及び精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」としてまとめ、示している。」

保育所保育指針「第2章保育の内容」（下線は筆者）

すなわち、身体的発達・社会的発達・精神的発達を提案している。乳児保育を教育の視点から見直すという含みがある。子どもの生活活動は、個別的情動的交流が土台となることに注意を払いたい。「子どもが生活する活動を通して個別的情動的交流」を発展させていくことが保育課題の中核であると考えられる。特に、0歳児は家庭における特定の大人との関係である「存在・活動の支えあい」（図2）と「同質のケア」を生活活動の展開の中で受容することが重要である。つまり、情動交流を含めた家庭的保育のよさを引き継ぐ必要があり、そのよさは生活活動の中で行われる。保育者はさまざまな生活活動を通して子どもを理解し応答するのであるが、例えば、「この子の食の行動では、ご飯は小さくかためると食べるが、ばらばらでは食べない」などといった生活における子どもの行動理解が必要である。また、食の場面において「大人が子どもと一体となり食行動が実現していくことが保育である」との理解が重要である。これはある種の「配慮・援助」と理解する保育者も多いが、こうした「存在・活動の支えあい」（図2）という「ケアを行う関係」こそが、相補的關係といえる。

保育所保育指針「第2章保育の内容」には以下のようにも示している。

ア乳児期の発達については、視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。これらの発達の特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われること

が特に必要である。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

乳児期は、「感覚及び運動機能が発達し、応答的関わりが乳児期の保育の特徴」として示されている。また、「乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要」と示されている。「応答的関係」が指導法として示されるとき、コミュニケーションのあり方ととらえられがちではないだろうか。乳児保育で大切なことは、「子どもと大人の相互依存的・相補的關係」である。例えば、食するときにスプーンで食べさせてもらうのは、「子どもの口をあける→スプーンで口までもっていく→口に入れる→飲み込む」などといった行為の過程があってこそ可能となる。つまり、ある部分を大人が担い、ある部分を子どもが担う。このような活動は、ほとんど大人の活動のように見えるが、実際は相補的關係である。「育てると育ちの融合」ともいえるこの関係は、乳児保育における生活活動のさまざまな場面で示されている。このような発想をもった乳児保育の位置づけを提案する。

保育所保育指針「第2章保育の内容」には、乳児保育の「ねらいと内容」については、次のように示している。

(2)ねらい及び内容

ア 健やかに伸び伸びと育つ

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基盤を培う。

(ア) ねらい

- ① 身体感覚が育ち、快適な環境に心地よさを感じる。
 - ② 伸び伸びと体を動かし、はう、歩くなどの運動をしようとする。
 - ③ 食事、睡眠等の生活のリズムの感覚が芽生える。
- (イ) 内容
- ① 保育士等の愛情豊かな受容の下で、生理的・心理的欲求を満たし、心地よく生活をする。
 - ② 一人ひとりの発育に応じて、はう、立つ、歩くなど、十分に体を動かす。
 - ③ 個人差に応じて授乳を行い、離乳を進めていく中で、様々な食品に少しずつ慣れ、食べることを楽しむ。
 - ④ 一人ひとりの生活のリズムに応じて、安全な環境の下で十分に午睡をする。
 - ⑤ おむつ交換や衣服の着脱などを通じて、清潔になることの心地よさを感じる。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

この項目で基本となることは、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基盤を培う」である。そのため、ねらいの語尾は、「心地よさを感じ

る。」、「運動をしようとする。」、「感覚が芽生える。」と示され、内容の語尾は、「心地よく生活をする。」、「十分に体を動かす。」、「食べることを楽しむ。」、「十分に午睡をする。」、「心地よさを感じる。」と示されている。当然のことのように思えるが、果たしてそうであろうか。この視点は乳児保育の実際において周知しているように、「自己選択活動」(図2)である姿勢の転換を始め「さまざまな身体移動・活動の感覚」は、大人への依存や一体的活動・やり取り(〇〇ちゃんここまでおいで→きたきた→「オーかわいい」等)という相補的關係があってこそ育つものであると理解される。乳児保育の指導法の基本は、子どもと保育者の一体的な相補的關係であり、その関係性の中でこそ運動感覚が育つことへの注意が必要といえる。

この視点は、次の「イ 身近な人と気持ちが通じ合う」とつながるが、このことはどのように示されているのだろうか。

イ 身近な人と気持ちが通じ合う

受容的・応答的な関わりの下で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。

(ア) ねらい

- ① 安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる。
- ② 体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。
- ③ 身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える。

(イ) 内容

- ① 子どもからの働きかけを踏まえた、応答的な触れ合いや言葉がけによって、欲求が満たされ、安定感をもって過ごす。
- ② 体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受け止めてもらい、保育士等とのやり取りを楽しむ。
- ③ 生活や遊びの中で、自分の身近な人の存在に気づき、親しみの気持ちを表す。
- ④ 保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ。
- ⑤ 温かく、受容的な関わりを通じて、自分を肯定する気持ちが芽生える。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

この項目で基本となることは、「受容的・応答的な関わりの下で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。」である。ここでのねらいは、「共に過ごす喜びを感じる。」、「保育士等と気持ちを通わせようとする。」、「愛情や信頼感が芽生える。」と示され、相補的關係の視点から書か

れているといえなくもない。しかし、いくつかの課題がある。1つめは、大人との関係が成立するためには、さまざまな生活活動が築かれる必要がある。例えば、授乳の積み重ねの中で大人との関係が育つ。また、子どもと大人と一緒に「何かをちぎったりするような活動」の繰り返しを通して、楽しかった体験が大人との関係性を構築する。つまり、子どもと保育者の関係性を育てるためには活動の内容を見通す必要があるといえる。2つめは、乳児保育における、子どもと保育者との関係性の土台は、子ども一人ひとりが保育者一般との関わりではなく、特別な大人（保育者）とのやり取りと交流を積み重ねていくことへの視点である。すなわち、親・保護者との関係性と同様に、「この人でなければいや」という関係の構築が重要である。基本は、子どもにとっての1対1の関係が作れることであり、「この先生だったらしがみつく」ことができるような関係が重要である。3つめは、子どもの活動の中にある子どもの意図性・子どもの内面性を読み取る大人が必要である。活動を通した育ちへの視点は、ここにある。乳児保育は、子どもの感情表現行動（泣くなど）にとらわれがちである。子どもと保育者の関係性では、子どもの意図性を「理解されている」という子どもの感覚は重要である。このためには、子どもと保育者の「対等な交流活動」（図2）の中でこそ、保育者の専門性を発揮する必要がある。このため、大人との「対等な交流活動」は、「食べる・一緒に寝る等」といった生活経験（活動）だけではなく、「追う－追われる」などの遊び体験（活動）の中で1対1の関係は生じるといえる。また、子どもが保育者から「理解されている」と感じる内面性への感覚の育ちが重要である。子どもと保育者の交流のないところで子どもの育ちはないと考えるべきであり、それはどちらかの一方通行ではない。むしろ相補的關係が必要である。

では、次に、「ウ身近なものと関わり感性が育つ」という活動には、どのように示されているのだろうか。このことに触れているのだろうか。

ウ身近なものと関わり感性が育つ

身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。

(ア) ねらい

- ①身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ。
- ②見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わりとする。
- ③身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。

(イ) 内容

- ①身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。
 - ②生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。
 - ③保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。
 - ④玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。
 - ⑤保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。
- 保育所保育指針「第2章保育の内容」（下線は筆者）

この項目で基本となることは、「身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。」である。ここでのねらいは、「様々なもの

2. 1歳以上3歳未満児における保育者の関わり

次に、1歳以上3歳未満児において、以下に示すように、5つの領域に基づき、心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ、視点ごとに「ねらいと内容」及び、「内容の取り扱い」が記載されている。この時期は基本的に3歳以上の5つの領域につながる視点で示されている。

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容 (1) 基本的事項

アこの時期においては、歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと、基本的な運動機能が次第に発達し、排泄の自立のための身体的機能も整うようになる。つまむ、めくるなどの指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱など

も、保育士等の援助の下で自分で行うようになる。発声も明瞭になり、語彙も増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分でできることが増えてくる時期であることから、保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある。

イ本項においては、この時期の発達の特徴を踏まえ、保育の「ねらい」及び「内容」について、心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ、示している。

ウ本項の各領域において示す保育の内容は、第1章の2に示された養護における「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容と、一体となって展開されるものであることに留意が必要である。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

実際には、領域のねらい・内容は、3歳児以上の内容の基礎というような位置づけとなり、実際には5領域のねらい・内容の語尾が基礎と考えられるような言葉として示そうとしている。すなわち、発達過程上のつながりを意識しつつも3歳以上の前段階であることを示しているといえる。ここでは、「保育士等の援助の下で自分で行うようになる。」、「自分でしようとする気持ちを尊重」、「応答的に関わる必要がある」と示されている。子どもの自主的なものへと移行するが、相補的生活活動については明確ではない。むしろ指導法としては、「応答的關係」が指導法として示され、コミュニケーションのあり方ととらえられがちではないだろうか。

保育所保育指針「第2章保育の内容」には、1歳以上3歳未満児の「ねらいと内容」については、次のように示している。1つめは、アの位置づけである。アは養護の目標を提示しており、イにおいて保育の領域後との教育目標を提示している。幼児教育は子どもの生活から見ると生活活動に即して保育・教育される。ウにおいては、一体のものだとしていることは当然のことといえる。むしろ、養護を含めた生活活動を土台としたとき、「どのような保育・教育が必要であり可能なのか」を指導法として考えることもできる。

2つめは、生活活動への意欲の展開と進化である。この時期子どもたちは自分の生活活動を通して「セルフ」(自己)を確立し大人との依存関係・一体化の関係から脱却していく。生活活動を通して、子どもの好みが見えてくる。食べ物の好き嫌いなどは主に食べやすさ(大きさ・硬さなど)・味の程度などに左右されるが、味覚を土台とした好みへと成長していく。こうした生活活動

の中で、子どもが活動に対する意欲(楽しさを軸とした)をどう育んでいくのかが課題といえるが、保育所保育指針の中では相補的關係による生活活動が見えてこない。5つの領域に示されるねらいと内容は、相補的關係によって実践では保育者が支え発展させているといえる。しかし、0歳の時期とは異なり、1歳以上3歳未満児は、移動などの運動はほんの少しの手助けですむ場合もあり、言語の活動のように相補的關係が重要なものもある。そのように考えると、領域が前面に出ることで、かえって子どもの活動が見えなくなるともいえる。生活への意欲・生きる力は、子どもの興味・関心にも規定され、生活と遊びの領域でねらいを考える方がよいとも考えられる。

3. 乳児保育における計画の編成と指導法

(1) 乳児の保育内容の編成とは

では、どのように保育内容の編成をするべきであろうか。保育所保育指針は保育内容の編成として、「保育の計画及び評価」は次の3つを念頭におくことを提示している。

ア保育所は、全体的な計画に基づき、具体的な保育が適切に展開されるよう、子どもの生活や発達を見通した長期的な指導計画と、それに関連しながら、より具体的な子どもの日々の生活に即した短期的な指導計画を作成しなければならない。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

ここから理解できることは、全体的な計画がまずあり、その上で、「子どもの生活や発達を見通した」長期指導計画と「具体的な子どもの日々の生活に即した」短期的な指導計画を作るということである。ここでの注意は、長期・短期とも「子どもの生活に即して」編成することを方向付けていることである。では、具体的にどうすればよいのであろうか。

イ指導計画の作成に当たっては、第2章及びその他の関連する章に示された事項のほか、子ども一人ひとりの発達過程や状況を十分に踏まえる。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

「子ども一人ひとりの発達過程や状況を十分に踏まえる」としているが、そのためには応答的な指導法だけではうまくいかない。子どもと保育者という「相補的關係」への着目が必要といえる。また、留意しなければならない事項として、次の点を示している。

(ア) 3歳未満児については、一人ひとりの子どもの生育歴、心身の発達、活動の実態等に即して、個別的な計画を作成すること。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

そして、やや具体的に次の手順を示している。

ウ指導計画においては、保育所の生活における子どもの発達過程を見通し、生活の連続性、季節の変化などを考慮し、子どもの実態に即した具体的なねらい及び内容を設定すること。また、具体的なねらいが達成されるよう、子どもの生活する姿や発想を大切にして適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるようにすること。

エ一日の生活のリズムや在園時間が異なる子どもが共に過ごすことを踏まえ、活動と休息、緊張感と解放感等の調和を図るよう配慮すること。

オ午睡は生活のリズムを構成する重要な要素であり、安心して眠ることのできる安全な睡眠環境を確保するとともに、在園時間が異なることや、睡眠時間は子どもの発達の状況や個人によって差があることから、一律とならないよう配慮すること。

カ長時間にわたる保育については、子どもの発達過程、生活のリズム及び心身の状態に十分配慮して、保育の内容や方法、職員の協力体制、家庭との連携などを指導計画に位置づけること。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

示されて文言の語尾に着目すると、「子どもが主体的に活動できるようにすること。」「配慮すること。」「配慮すること。」「家庭との連携などを指導計画に位置づけること。」等となっており、子どもの主体的な活動を後方から支援する「配慮・援助」が位置づけられている。

(2) 指導計画の実施

しかし、具体的な手続きを見ると、「イ子どもが行う具体的な活動は、生活の中で様々に変化することに留意して、子どもが望ましい方向に向かって自ら活動を展開できるように必要な援助を行うこと。」といったように示され、活動を押さえていることが理解される。すなわち、「(3)指導計画の展開」では次のように述べている。

「指導計画に基づく保育の実施に当たっては、次の事項に留意しなければならない。

ア施設長、保育士など、全職員による適切な役割分担と協力体制を整えること。

イ子どもが行う具体的な活動は、生活の中で様々に変化することに留意して、子どもが望ましい方向に向かって自ら活動を展開できるように必要な援助を行うこと。

ウ子どもの主体的な活動を促すためには、保育士等が多様な関わりをもつことが重要であることを踏まえ、子どもの情緒の安定や発達に必要な豊かな体験が得られるよう援助すること。

エ保育士等は、子どもの実態や子どもを取り巻く状況の変化などに即して保育の過程を記録するとともに、これらを踏まえ、指導計画に基づく保育の内容の見直しを行い、善を図ること。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

このように子どもの自己活動を土台として必要な援助(計画)を行うとしている。保育の環境の項では次のように述べている。

(3) 保育の環境

保育の環境には、保育士等や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、更には自然や社会の事象などがある。保育所はこうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう、次の事項に留意しつつ、計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。

ア子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。

イ子どもの活動が豊かに展開されるよう、保育所の設備や環境を整え、保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること。

ウ保育室は、温かな親しみとくつろぎの場となるとともに、生き生きと活動できる場となるように配慮すること。エ子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。

保育所保育指針「第2章保育の内容」(下線は筆者)

ここでは、「計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない。」としている。この「保育の環境」で示されているア・イ・ウ・エといった4つの段階が重要である。ここでは環境と関わって保育実践の具体的な方向を示し、その内容は子どもの活動に関わるものである。しかしながら、具体的には、「配慮すること。」「努めること。」「配慮すること。」「整えること。」等といった、子どもの主体的な活動を後方から支援する「配慮や援助」として示されている。乳児保育において、何が発展する生活と遊びであり、どのような相補的関係を構築するのかを明確にすることで、より保育の環境が生きてくると考える。

(3) 保育所保育指針を踏まえた「乳児保育の課題」

以上のことから、乳児保育の理念と方向、保育計画の編成論を考えたとき、最終的には保育現場における創意

工夫とその時々判断が重要であると受け止めることが大切である。また、具体的な実践を一定の方針をもって積み上げ・整理することができる。

乳児保育は、全体としての子どもの生活活動・生きる活動を基盤とした実践を通して子どもの成長・発達を確かなものとするところである。これを逆にすると子どもを発達の側面から切り分けた上でその統合を図るということになる。例えば、「生活の中での移動」の積み重ねなしに子どもの運動能力（例えば歩く運動）の発達はなく、大人との交流を通した「情動をやり取りする生活」の土台があってこそ応答力は育つ。乳児保育は、子どもが「生活する」ことを土台として考える必要がある。実践的にいえば、乳児保育において、多くの大人は運動能力の育ちのために特別な練習をしているわけではない。むしろ、子どもの生活活動における子どもの行動を通して保育のありようを検討している。そのためには、日案は単なる日課ではなく、「乳児がどのような生活を送ることが望ましいのか」、「生活を基盤とした保育はどうあるべきか」を考える視点が必要である。そこには保育者と子どもが存在し、その相補的關係が指導法の基盤であると考えている。

Ⅲ 乳児保育における指導法とは

1. 応答的關係と相補的關係

乳児保育において、子どもと保育者の関わり方を指導法として考えるとき、応答的關係と相補的關係は同じではないかという考え方もある。応答的關係としての指導法は、子どもの願いに応じた保育という理解もあり、多様なコミュニケーションを指している場合もある。どちらも大人の果たす役割を積極的に認めている。いずれの場合も、相補的關係としての指導法と重なっていると理解することも可能である。

しかし、相補的關係における指導法は応答的關係の指導法とは次の点で異なる。

- ①相補的關係においては、生活活動はあくまでも子どもの活動内容を提示しようとしていることである。すなわち、相補的關係における生活活動は、子どもの活動

の質、子どもの個性を念頭において生活活動を考えることを基盤とし、大人の関わりによって子どもの活動が変容することを示している。一方、応答的關係における指導法は、生活活動における保育のあり方そのものを提示しようとしている。応答的保育とも呼ばれ、狭く考えれば、保育者のコミュニケーションのありかたを示している。

- ②相補的關係においては、身体移動にみられるように、保育者・大人が子どもに補助する関わり・関係を乳児保育の特質として取り出そうとしている。一方、応答的關係においては、保育のありかたをコミュニケーションという視点からとらえようとしている。乳児保育は、応答的關係だけではなく、相補的關係が必要と考える。
- ③指導法という点から考えるときには、子どもの活動における相補的關係といってもよいかもしれない。むしろ、生きる力としての生活適応においては、応答的な活動が重要といえる。子どもの「活動の質」と「個性」を考えるとき、このような視点をもった「保育内容編成」及び「保育の計画」を構築することが望ましいと考える。
- ④発達の・質的活動の個性性を想定することが可能である。例えば、生後6～9ヶ月の子どもは、相補的關係が必要である。しかしながら、姿勢の制御にみられるように、大人に依存している相補的關係である。これに対して、移動の自由（自分の意思で見たいところに行く、触りたいところに行く、等）が確立し、身振り表現などが表出してきた頃には、相補的關係でありながら、共同的關係ともいえる。子どもの活動の質を想定することにより、相補的關係は発達の過程にあわせてタイプを想定できると考える。
- では、一般的な乳児保育の日案をみても（表1）。一様に、相補的關係は見受けられないといえる。大人の活動と子どもの活動は別々に示されている。また、前述したように、子どもの主体的な活動を後方から支援する「援助・配慮」が多く見受けられる。このようなことは、乳児保育における保育者の役割として一般化されているといえるだろう。

表1 一般的な日案における相補的關係

日案		相補的關係	大人の活動	子どもの活動
事例1	時系列	なし	援助・配慮	予想される子どもの活動
事例2	活動時間中心	なし	援助・配慮	予想される子どもの活動
事例3	環境重視	なし	環境構成 援助・配慮	生活・遊び
事例4	基本的生活習慣重視	なし	援助・配慮	食事・睡眠・排泄等

2. 保育者の役割

以上のことは、保育者の役割を考える視点を提起している。従来からいわれている児童中心主義と系統主義といった保育の考え方の相違ともいえる。しかしながら、子どもの生活活動・遊び活動における大人の関わり方の違いであること、「育てると育ちの融合（ここでは以下「融合保育」と呼ぶ）」という視点から具体的な指導計画論を通して明らかにする。乳児保育においては「相補的關係」が生活活動には必要であり、両者の「育てると育ちの融合」が必要であることを提案する。乳児保育は、この2つの活動が融合するところから始まっているといえる。2つの活動は、互いに補い合いながら、「保育者は子どもに関わり過ぎないように、また放置しすぎないようにする」ことが大切である。その中でも、0歳における保育者と子どもの関係性は、情動交流を土台としなければならない。「大人への依存的相補的關係」が生活活動において必要である。しかしながら、保育者の一方的な働きかけではなく、子どもの気持ちの尊重が大切である。例えば、食事の場面では、「大人の思いどおりに口に食べ物を運ぶ」、「食べさせようとする」のではなく、子どもが「口をあけたくなる」ようにするには保育者はどのような関わりをすればよいのかを考える視点が必要である。日案においては、いきなり食事時間ではなく、食事時間までの保育者と子どもの生活活動を通した相補的關係があれば、食事時間に「口をあけたくなる」のではないだろうか。保育者は、子どもが「口をあけない」、「食べない」という判断ではなく、こうした子どもの内面性への気づきが重要といえる。今後、事例を集積しながら乳児保育の実践や保育内容編成に役立つ相補的關係における指導法を提案していきたい。

3. 子どもの生活活動と保育編成の視点

では、「子どもの生活活動から保育の編成を考える」ということはどういうことであろうか。乳児保育は、子どもの活動から考えるのか、ねらいから考えるのかといった議論がある。「融合保育」として考えるときには、

この2つの統合を目指した活動の構造を理解しなければならないと考える。その構造について、玉置は、「指導計画の考え方とその編成方法」北大路書房（2008）で以下のように示している。すなわち、指導計画作成の6つの原理として、「①子どもの事実から教育課程を編成する、②保育は子どもと保育者がともにつくる、③保育の中心は子どもの活動であり、その中核に遊び活動と生活活動がある、④活動は内的活動と外的活動がある、⑤活動は関係の面と活動内容の面の両面がある、⑥子どもはお互いに尊敬しあう関係を形成しながら力を発揮するなかで、成長を遂げていく」を提示している。つまり、子どもの活動は、「遊び活動・生活活動」から捉え、さらに活動は「内的活動、外的活動」といった視点から捉えたと示している。また、活動は、「子どもと保育者」、「子どもと子ども」の関係性で具現化すると示している。すなわち、「外的活動×内的活動、活動内容行動×関係行動」のマトリクスを念頭において保育のプランを考えると「ねらいのポイント」は、「1. 面白さのねらいは内的活動（活動内容及び関係性）⇒2. 関係のねらい（対大人・対子ども・自己など外的関係）⇒3 活動内容のねらい（外的活動・知識技能）とすることができる。

この考えを乳児保育に置き換えたらどうなるであろうか。子どもを育てる目標・ねらいを「外から見える活動」を軸にすることは、保育所保育指針（1965）で主張されてきた。生活活動を通して乳児保育で育てることは、「遊びや生活の中で子どもの行動する力である」と考えていたからである。しかし、この「子どもの行動する力を育てる」ということは、保育者が「望ましい経験や活動」と認めたことに子どもを追い込むのではなく、生活活動の構造を理解し、保育者が子どもに働きかける必要がある。例えば、月例ごとに掲げた「スプーンを使う」などの行為は、目安であっても目標・ねらいとしては一面的と考えなければならない。「スプーンを使う」行為を単純な「スプーンですくう・口に持ってくる・口をあける・食べる・噛む・飲み込む」という使い方、食べさせ方のような視点を前提にした示し方になっ

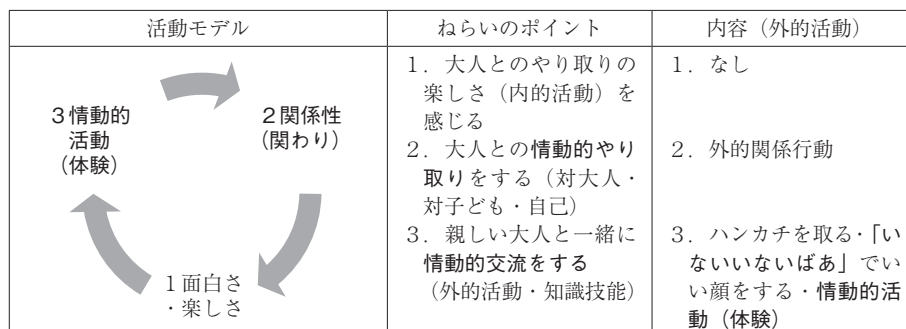


図1 活動モデル（0歳児）

表2 相補的關係のタイプ（1歳6ヶ月）

關係のタイプ	1歳6ヶ月 歩く	1歳6ヶ月 自動車に見立てる
①依存的相補的生活活動	一緒に手をつないで歩く	保育者が手を添えて、四角の木を動かす。
②相補的生活活動	一人で歩く行為をサポートする	大人が動かしている行動に「ブーブー」と言い、行動をアナウンスする。
③相補的共同的生活活動	一人で先に歩くが、時々手をつなぐ	保育者も「ブーブーだぞ」、「早いぞ」などと言いながら共同する。
④自主的生活活動	手をつながない	子どもが自分で車を動かす。

ている。乳児は、もちろん「食べる機械」ではない。「これおいしいな・先生おいしそうに食べている」等といった、食べる行為への「楽しみ」を感じることが重要である。さらには、子どもの意思・行動イメージが育つことが大切であり、「スプーンはこうやって使うよ」といった技能のイメージ等への活動を通した子どもの内面性への理解を日案等に位置づける必要がある。特に、0歳において、活動の基盤は、保育者である大人との情動的交流であることから、例えば「いないいないばあ」の活動を念頭におけば、前述したような結論を導き出すことも可能といえる。活動モデル（図1）が示すように、「面白い」、「楽しい」から入り、「繰り返す」という連続性が重要である。

4. 相補的關係を土台とした生活活動

乳児保育においては、子どもの活動に対して何かを指示したり、特定の環境を与えたりすることではなく、子どもと一つの活動を遂行することが大切である。この遂行に当たって、保育者は子どもの遂行できない部分を補ったり補強したりすることが、生活活動における相補的關係である。その前提は、子どもが自分でする活動があつてこそといえる。自分でする活動をぬきにしては相補的關係は成立しない。このような生活活動は、子どもの発達と共に変化し、子どもの生活活動の内容・体験によっても変化する。また、保育者の関わり方によっても変化する。あくまでも試論であるが、以下のような「①依存的相補的生活活動、②相補的生活活動、③相補的共同的生活活動、④自主的生活活動」といった4つの段階を相補的關係のタイプとして念頭におくことも可能である。（表2）この4つは、活動によって異なる「相補的關係のタイプ」を必要としていることを示す表である。例えば、「見立て遊び」は、保育者が見立ての側面を補う必要がある場合が多い。見立て遊びのようなイメージで考える活動は、多様な発達を必要とする。しかし、「自動車に見立てる」体験が、イメージを使った思考の元となるとも考えられる。子どもの発達は、同じ相補的關係であっても活動ごとに関係性が異なり、こうし

た総和が子どもを育てていくともいえる。

人間は生きていくうえでさまざまな働きかけを活動を通して行っている。保育は、「環境を通して」と言われるが、例えば次のような構造を考えてもよいのではないか（図2）。

この活動と関係の構造は、①関係か活動内容かではなく、その双方に同時的に着目することを示している。また、②行動には外に働く行動とその際に人間が内的に働きかけていることがある。前述したように、玉置（2008）が指摘している「外的活動×内的活動、活動内容行動×関係行動」のマトリクスを念頭において考えると、「活動」はこのような構造を持っていると考えられる。具体的に、2歳児の「焼きそばづくりごっこ」から「活動と関係の構造」考えてみる（表3）。まず、「焼きそばづくりごっこ」の外的活動において、子どもは道具を必要とする。その道具を使うには、自分の手や足の身体の運動が必要である。道具の使用は、仕事だけではなく、子どもの様々な生活活動・遊び活動においても使用している。主には外的活動であるが、道具の使用や操作について、子どもの内面性への理解も必要である。次に、「焼きそばづくり」という活動の過程がある。重要な側面は、活動を開始する際の「目的・目標」を持つことであ

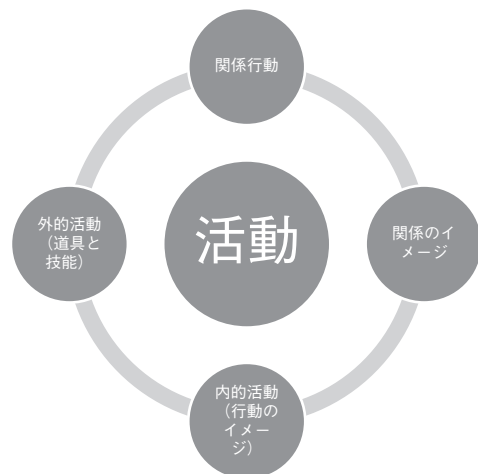


図2 活動と関係の構造

表3 2歳児の焼きそばづくりごっこ 「活動と関係の構造」

焼きそばづくりごっこ	活動内容	関係行動
外的活動	フライパンで毛糸を操作	大人がそばで見守ってくれていることを視覚で確認
内的活動	おそばのイメージを持って毛糸をおそばの操作をイメージする	「おいしそうといってくれるかな」

表4 2歳児の「焼きそばづくりごっこ」 相補的關係（子どもと大人）

焼きそばづくり	子どもの活動	⇔	保育者の活動
外的活動	なべと毛糸の操作	⇔	環境・道具を用意する 子どもの行動を見守る
内的活動	なべと毛糸の操作が楽しい	⇔	子どもに聞こえるように「やきそばおいしそう」とつぶやく
外的関係活動	時々保育者を確認	⇔	微笑んでいる
内的関係活動	鍋が大きくてやりにくい	⇔	おそば出来るのかな

り、「動機付け・興味の持ち方」が明確になることである。この活動の過程では、「言語」などの働きがある。子どもの活動には目的があり、その目的を理解することから保育内容編成の「ねらい」や「内容」につながる。

この時に、前述してきたような子どもと大人の相補的關係が重要である。見立て遊びやごっこ遊びには、生活適応活動の意味がある。生活適応活動とは、子どもを取り巻く主な関係性を示している。乳児保育では、子どもは大人との関係なくして生活することも、生きることもできない。しかしながら、それは子どもが大人に従属する関係ではない。子どもは、主体性と言わなくとも、自立した活動を自ら行っている。乳児保育における個別性を考えるとき、子どもによって、相補的關係のあり方は異なる。前述した表3は、「焼きそばづくりごっこ」である。子どもと保育者が相補的關係の中で活動しているといえる。それを4つの側面で表せば次のように図式化することも可能である（表4）。

この例では、保育者は、子どもの内的活動に対して「子どもの行動の意味づけ」を言葉で行っていることがわかる。「焼きそばおいしそう」と、言葉と行いが一致するような働きかけをしている相補的關係の場面である。子どもはなべと毛糸に着目しており、毛糸を指すことで「やきそばが出来ている」ということを行動で示している。保育者は、そのような内的活動を読み取り、言語化するという相補的關係を行っている。

上記のように考察してみると、乳児保育における指導法は、保育の中で何が中核となるのかといった課題を整理する必要があることがわかる。しかし、まだ試案であり、保育実践に役立つ整理とはいいがたい。相補的關係における指導法をもとにした生活活動モデルの作成は、今後の課題である。

Ⅳ 乳児保育における活動内容

1. 乳児保育における基礎活動

大阪総合保育大学総合保育研究所 幼保一体化プロジェクト「幼稚園と保育所のいいところを見つめなおす」ふくろう出版（2018）のなかで、玉置は、以下に示す「活動の要素を取り巻く概念」を幼児の基礎活動として次の3つの視点を示している。

- ・基礎活動1. （生命・安全活動／欲求充足の喜び）
- ・基礎活動2. （身体コントロール活動／
自分で身体を動かすことの楽しさ）
- ・基礎活動3. （関係・交流）

この内容を手がかりに乳児保育を考えるとき、次の基礎活動を念頭におくことも可能である。乳児保育に置き換えると、「①いのちをつなぐ活動 ②身体コントロール活動 ③保育者との関係・交流活動」の3つである。しかしながら、乳児保育では、子どものある側面をそれぞれ別個にみるのではなく、その子どもの全体像をみる時の中心となる活動といえる。すなわち、別々ではなく、ひとつの縄のように一緒に関係しあい、影響しあいながら育つ。この「生活の基礎活動」の育ちから、「生活技能（適応活動）」、さらには「遊び活動」へと活動が分化していくと考えられる。

前述したように、関係のタイプ（依存的相補的生活活動・相補的生活活動・相補的共同的生活活動・自主的生活活動）は「相補的關係」による生活活動として位置づけてきた。（表2）以下にまとめた内容は、大方案として、基礎活動1～3を活動から位置づけをなおしている。すなわち、乳児保育における活動論の分類として提

案する。

- | |
|--|
| <p>1) 基礎活動1. (生命・安全活動／欲求充足の喜び)
→<u>依存的相補的生活活動</u></p> <p>2) 基礎活動2. (身体コントロール活動／
自分で身体を動かすことの楽しさ)
→<u>相補的生活活動、相補的共生的生活活動</u> (物との出会いはまさにこういう状況である。)</p> <p>3) 基礎活動3. (関係・交流)
→<u>相補的生活活動、自主的生活活動</u> (大人をリードする活動、見立て遊び、2歳になるとつもらそび)</p> |
|--|

0歳の生活活動は、遊びを含むが生活活動が主である。それは、「1) 基礎活動1. (生命・安全活動／欲求充足の喜び)」が目標であり→依存的相補的生活活動といえる。子どもの自己活動を尊重し、大人は関わり過ぎてはいけない時期である。勿論、放任ではないが、子どもにとっては「大人である保育者の親切心が迷惑である」ことも考えなければならない。抱くことは大切であるが、時に自己活動を妨害することにもなる。保育者の役割とは何か、相補的生活活動を目指すことが大切といえる。一方、この時期は「しつけ」という考えから保育者を狭い世界観に追い込みかねない時期でもある。安全性や基本的生活習慣の確立は必要であるが、一面性があり、全ては人との関係性、すなわち心地よい保育者との関係性なしには、相補的關係に基づいた生活活動は生まれないといえる。

「基礎活動1」は、0歳が中心であり、①生命・安全活動 (いのちをつなぐ活動) ②欲求充足の喜びの2つである。この「基礎活動1」は、乳児保育において子どものある側面をそれぞれ別個にみるのではなく、その子どもの全体像をみとくときの中心となる活動といえる。ヒトとして生まれた乳児が、人間として「自己」、「自分は人間である」ということを認識していく活動であるとの理解が大切である。この「自己形成」には、「身体的自己」、「活動的自己」という身体を使う運動的側面が乳児には重要であり、身体を動かしながら自己への気づきがはじまると考えられる。乳児にとってこの「基礎活動1」は単なる「～を楽しむ」ではつまらない活動である。活動があってこそ欲求充足の喜びとなり「情動」という心が育つといえる。そのため、子どもと保育者である大人の関係性、特に乳児の場合は情動交流なくして活動の育ちはないともいえる。この「基礎活動1」における指導法は、子ども中心でも大人である保育者中心でもなく、子どもと保育者である大人の相補的關係が基盤となる。発達のはじめは、生活の「基礎活動1」から身体と心を一体的に「同時に」みることが大切である。この場合の発

達の側面とは、「身体的健康と成長、知覚の発達、微細・粗大運動の発達、社会性の発達、情緒の発達、人との関係性の発達」等が相互に影響を与えるので統合的全体としてみること、全体としての子どものとらえかたが重要といえる。

「基礎活動2」は、1歳が中心であり、①身体コントロール活動②自分で身体を動かすことの楽しさの2つである。この生活活動は、「2) 基礎活動2. (身体コントロール活動／自分で身体を動かすことの楽しさ) →相補的生活活動、相補的共生的生活活動」といえる。物との出会いはまさにこういう状況である。2歳になってくると遊びが分化してくる。そのため相補的關係による遊び活動への転換が図られてくる。自主的な活動である見立て遊びやまねっこあそびが増えてくる。すなわち、相補的關係による生活活動とは、保育者が「言語としての補い」と共に「行動としての補い」もする。基礎活動2は、相補的關係において「寝る→座る→立つ」への身体コントロール活動といえる。乳児保育では大人との相補的關係が必要である。乳幼児は、周囲の世界をどのように理解して認識しているのか。乳幼児の認識や思考は、周囲の環境 (ものや人) に対して身体的に働きかけ操作すること (相互作用) によって、その世界について認識していくという過程を見出している。また、外界という環境に対する関わり方が、発達に伴って構造的に変化する。しかし、実現するには、大人と子どもの相補的關係が必要である。一人で何かができるのではなく、またむりやりでもない。ゆるやかな関係が必要である。3歳未満は、感覚運動期になる。このことは、「理解する・考える」というとき、大人は頭を使うと考えるが、乳児期は身体性を通じて周囲の環境や事物を理解していくとしている。一見、乳幼児が一人で環境に働きかけていくように思われがちであるが、実際は大人との相補的關係が必要である。その上で、周囲の環境 (社会・文化) の影響を受けながら相互作用で認知していく。

この「①身体コントロール活動」は、例えば、「寝たきり乳児」であったらどうか。大人への依存がなければ、「のどがかわいた」としても自ら飲むことも起きることもできない。大人がみてくれない限り、自らは周囲に働きかけにくいといえる。「泣く」ことから発信するしかないともいえる。相補的生活活動として「行動としての補い」が乳児保育には必要であることがわかる。しかしながら、乳児は単に受身ではなく、自ら主体的に足を使って身体をひねることから寝返りは可能となる。寝返りによって、腕や背筋で自らの身体を支えられるようになる。しかしながら、大人が抱くという相補的關係がなければ乳児の背筋力という身体性は育たないことに

表5 指導計画と5つの項目

	子ども理解	⇔	保育のねらい	⇔	保育内容	⇔	働きかけ	⇔	評価
長期指導計画									
短期指導計画									

なり、自らの身体を支えるという育ちが保障されない。抱くことを「抱き癖」という大人がいるが、抱かれなければ自ら起きることはできないのが乳児である。抱くことから背筋のみならず、首を回すこと、外の環境に目を向けること、視野を広げて外界の情報を得ることが可能となる。「相補的關係」が乳児保育の要といえる。また、「②自分で身体を動かすことの楽しさ」は、自分自身に対する自信や達成感につながる。座ること、さらには立つことは、乳児の身体性を著しく変化するのみならず、一気に周囲の環境への働きかけが変わり、能動的になる。まさに世界観が変貌する瞬間といえる。発達段階という「座る」「立つ」ではなく、全体が育つことへの意識が大人には必要である。しかしながら、大人からの「相補的關係」による「言語としての補い」である「じょうず、じょうず」、「こっちにおいで」、により、子どもは目標ができ、やる気になる。また、転びかけたら相補的關係による「行動としての補い」があってこそ、成功体験となって次への活動への意欲となる。

このような関係は、子どもと大人である保育者の相補的關係が基盤といえる。

2. 乳児保育における保育内容編成の方法

(1) 保育は5つの側面を押さえる

ここでは、乳児保育において、保育内容の何を整理するのかを明確にしておく必要がある。保育内容編成の軸は、「子ども理解、ねらい・目標、内容の編成、保育者の働きかけ、評価」であり、どのような編成を行っても5つが基本であることを念頭におく必要がある。これは、長期指導計画、短期指導計画を問わず同じ考えで編成することが重要である。

乳児保育では、具体的な活動から相補的關係を指導法として考える発想が求められる。すなわち、「子どもに今何が育ちつつあるのか」という子ども理解から活動やねらいを考え、相補的關係から指導することである。長期指導計画は、むしろこの子ども理解の実態にてらしあわせつつ、「育てると育ちの融合」という視点から具体的な指導計画を作成することである（表5）。

前述したことをまとめると以下ようになる。

①長期指導計画

長期指導計画は、「子どもに育てるべき大きな方向」、

「内的活動」を提示することを軸においた子ども理解を、育ちに転換することが大切であると考ええる。

②短期指導計画

短期指導計画は、その日の子どもの興味の持ち方などを考慮した「外的活動」から子ども理解を行う。または、子どもの発達から子ども理解を考える。保育者が「育ちの視点」を持っている場合には、特に活動内容にこだわることはないといえる。例えば、「起きたい、抱っこしてほしい」というような身体移動、食事行動においても子どもは「のどが渴いた、お腹がすいた食べたい」というような自己の欲求に沿った「意思の発揮を行っている」のである。大人が「この子はかわいい」などといった「子どもの存在を認める」ということと、同時に、子ども自身が「自分の活動を行っている」状況を示す。例えば、子どもは大人に抱かれ、ハグされることから「包み込まれること」を体験する。同時に、子ども自身が笑うことから「笑顔」を表出し、「いい顔」になって「大人を引き付ける活動」を展開する。すなわち、このような子どもの行為は、外的活動として笑うという「自分の活動」があり、結果として「大人を引き付ける活動」に展開している。また、相補的關係として「支える活動」は、子どもが自分で活動を展開するときにその活動の面白さを発見し、維持したりなどを通して子どもの活動が維持されるようにする活動をいう。

(2) 子ども理解

もう少し、乳児保育における子ども理解を相補的關係から以下のように分析してみる。

分離的自主性 → 自分でしようとする、これなあに、みてみてという。

分離的自主性は、保育者に見守られているという理解のなか、「自分で」何でもやりたい時期といえる。しかしながら、まだ大人の見守りは必要である。保育者は子どもが自分で「できた」という満足が得られるように見守ることが大切である。また、「これなあに」となんでも知りたがる時期でもある。保育者が「これは、いぬ」というように言語化しながら子どもの行動を助ける相補的關係である。例えば、子どもが紙を細かくちぎる活動

をしている場合、子どもはちぎる活動をしながらか人の理解を求めようとする。子どもが「みてみて」という内的活動を理解する保育者が存在するとき、子どもとの情動交流が生まれ、自分で意欲的に活動を継続しようとする。自己への自信が芽生えるといえる。この場合、保育者は見守り、一方「できた、できた」、「すごい、面白そう」という共感が大切である。

対等な共同性 → 玩具でやりとりをする、はいどうぞ、まねっこをする

対等な共同性は、子どもが自ら気持ちよくしてくれる保育者の真似をしようとする時期といえる。特定のしがみつきたくなるような保育者には、自分のお気に入りの物を「はい」といって渡したり、受け取ったりしながら面白がって笑う時期といえる。一緒に活動をして面白がってくれる心地よい保育者の存在が必要である。保育者は、子どもと一緒に同じ活動をする相補的關係である。例えば、見立て遊びややり取り遊びをする場合、子どもは、バクリと食べる真似をしながら大人にも食べるというようなそぶりをする。保育者が同じようにバクリと食べる真似をすると面白がってキャキャと笑う。何回も活動を繰り返しながら、保育者との情動交流が芽ばえる。保育者は、子どもの内的活動を観察しながら、お気に入りや、やり取りしたくなるような環境構成や教材(玩具)の準備が必要である。

サポートされる → そうしようかな、モデルの模倣

サポートされるは、子どもが大人の真似をしておはしを持つような時期といえる。保育者は、子どもがそろそろやろうとすることややりたがることを予測して必要な活動を誘導する相補的關係である。例えば、保育者は子どもに「つみきはこうね」と模倣しながら、子どもが「そうしてみよう」と思うようにサポートすることが相補的關係である。大人の押し付けではなく、子ども自身が「そうしよう」と思える活動であることが重要である。

一体的包摂 → 全面的依存、身体的依存、認知的依存、言語的依存

一体的包摂は、保育者が子どもの顔をみることで子どもが笑ったり、子どもから大人を引き付けるようなしぐさをしたりという相補的關係である。この時期は、保育者への全面的依存であるが子ども自身に欲求への応答性

が求められる。子どもが寝返り、お座り等といった行為は、大人の支えなしにははじめはうまくできない。子どもが自ら身体を動かそうとする時期や行為が働く時期である。保育者への身体的依存が必要である。保育者は、生活適応活動の全ての時間、子どもが気持ちよさを感じられるように内的活動に応答することが大切である。生活適応活動を通じて愛着関係という情動交流が生まれる。例えば、いないいないばあという活動を通じて、保育者が子どもの顔をみると、子どもははじめはじーっとみつめ、徐々に声をあげて笑うようになる。きもちよいこと、面白いことをしてくれる保育者が近づくとき手足をばたばたしながら求める行為をする相補的關係である。

以上、乳児保育としての子ども理解を相補的關係から「①分離的自主性、②対等な共同性、③サポートされる、④一体的包摂」として4つのタイプを示した。次に、この4つから「保育者の行動」として示す。

(3) 保育者の行動（主な月例から考える相補的關係）

子どもは全体として育つことから、月における「活動」や遊びの偏りがないかも確認が必要である。主な月齢から考える相補的關係を示す。

①生後3ヶ月頃から6ヶ月未満の保育

相補的關係では、子どもの行動は、「一体的包摂 → 全面的依存」であり、保育者の行動は、「一体的包摂 → 尊厳の承認、生存の承認」である。

保育所保育指針(2017)では「出生～3ヶ月未満」と一緒にのくくりになっているが、生後3ヶ月とは大きく異なる。保育所では産休明け保育になるが、3ヶ月までの乳児に比べて「泣く」ことが複雑になる。子どもは自らの欲求を「泣く」ことで表出する。「泣く」ことは外的活動であるが、保育者は、「子どもがなぜ泣いているのか」という内的活動、内的操作に着目することが大切であり、子どもの欲求に保育者が的確に応答できたならば、子どもと保育者との関係は心地よい情動交流となる。この子どもと保育者の関わりが、情緒の安定、快への気づき、人との関係性の育ちとなる大切な時期である。また、この時期には、喃語(母音を主とした「あーあ」「うっくん」という声)を発し始める。話しかけると、喃語で「あーあ」と応答することが観察されているが、この過程を経て言葉のやりとりにつながる。生後4ヶ月頃には首がすわり、身体各部分が動くようになる。運動能力が高まり、手におもちゃをもち、腹這いの

姿勢もとれるようになる。寝返りも始まり、身体の位置がかわるため、安全確保が必要になる。また、視線をかわすと、表情の変化が現れ、養育者に自ら働きかけるようになり、保育者が応答し、あやすとほほ笑み、乳児の表情は豊かになる。乳児は、自分から人に向かって笑いかけようになり（社会的微笑）、首がすわることで、保育者と対面するようになり、応答性が出てくる。保育者は積極的に応答することが大切であり（愛着形成）、特定の大人との情緒的な絆が生まれ、人に対する信頼感が育まれる。この時期は、生涯にわたる人間関係の基礎を培っていく大切な時期である。「いないいないばあ」等のふれ合い遊びは単なる遊びではないことは前述した。また、手が発達し始めるので、ガラガラ等の音が出たり、握ったりするようなおもちゃが必要になる。乳児保育の玩具（教材）は、育ちや活動に必要な物であり、保育者が子どもの内的活動や発達に必要なことを考えてこそ意味のある物、玩具（教材）となる。

②6ヶ月から1歳3ヶ月の子どもの発達と遊び

相補的關係では、子どもの行動は、「一体的包摂→身体的依存、認知的依存」であり、保育者の行動は、「一体的包摂→機嫌・感情の保持、生きる（生命）活動」である。

6ヶ月頃から、「寝返り」をし、「座る」「はう」「立つ」「つたい歩き」といった発達過程を経て、1歳3ヶ月頃までには「歩く」ようになる。1歳3ヶ月は、「歩く」ことが発達の目安になっているが、保育者の補助無しには歩き始めることは困難である。したがって、この時期の乳児には、運動発達に必要な環境と保育者の関わり方が重要である。また、「〇ヶ月はお座り」といった平均的発達は、一人ひとりの乳児にはあてはまらない。この時期は、子どもの内的活動への理解や一人ひとりの発達過程を理解することが大切である。以下に示す項目を参考に考えてみる。

- ・「寝返り」の頃：仰向けからうつぶせに寝返りをする。保育者は、子ども自身が身体を動かそうとする、または動きたいという内的活動に気づくことが大切である。相補的關係として、保育者は少し離れた所に玩具を置いて音を鳴らしたりして一緒に楽しみながら情動交流の芽ばえが育つ。同時に子どもは心地よい保育者との関係から、前に進もうと身体をうごかす。以下に示す項目を参考に考えてみる。ことが重要である。
- ・「お座り」の頃：座り始めの赤ちゃんは、クッションなどを置き、安全面に注意する。このような依存的相補關係では、座る環境構成が大切である。子どもが機嫌良く座るように保育者は顔を見つめ、「座れた、座れた」

とって言葉を交わすことが重要である。しかしながら、子どもは自分では態勢を変えられない。保育者に依存している相補的關係であることを忘れてはいけない。

- ・「はいはい」の頃：腕や脚、腹筋を使って「はう」ことをする。子どもは自分で身体を使ってはう行為を行うが、保育者は、床に物を置かないでスペースを広くとるような環境構成としての相補的關係が必要である。また、保育者は子どもと一緒に「まてまて遊び」、「トンネル遊び」など同じ活動をする。保育者も「はう」楽しさを一緒に味わいながら、子どもとの情動交流が芽ばえる。足の指先で床を蹴るため、裸足で過ごす。滑り台の斜面やマットの段差遊びに発展することで手足や腰の筋肉を鍛える活動にもなる。

保育者は、子どもの内的活動への視点が必要である。

相補的關係では、子どもの行動は、「一体的包摂→言語的依存」であり、保育者の行動は、「一体的包摂→技能の保持」である。

以下に示す項目を参考に考えてみる。

- ・「つかまり立ち」の頃：手の届く場所につかまる。保育者は、子どもが自分で歩いたと思えるような環境を再構成し、見守り、角を覆うなど安全対策をするという相補的關係が必要である。また、子どもは、いすや箱などを押すようになるため、保育者は安定感のある手作りの手押し車や段ボールの箱などを整え、「よいしょ、よいしょ」と言葉をかける活動が相補的關係として必要である。
- ・「伝い歩き」から「自立歩行」の頃：ベッドの柵やロッカーなどで歩くことを繰り返すうちに、何もない所から一人で立ち上がり、一歩を歩くようになる。保育者は、子どもが自分で歩いたと思えるように「じょうず、じょうず」と言いながら、そっと手を添え補助をする。子ども自らが大人の手を持って自分のペースで歩けるような相補的關係が求められる。また、子どもは指先を使った探索活動も盛んになる。子どもがくり返し、ちぎったり、壊したりするような活動ができるように、保育者も一緒に楽しむような相補的關係が必要である。保育者は「はいどうぞ」と次々に渡したり、子ども自身が保育者とのやりとりが面白くなるような相補的關係が必要である。

子どもが自らやりたくなる満足できる遊びを提案することも相補的關係である。

③1歳3ヶ月から2歳未満—1歳児クラス—

相補的關係では、子どもの行動は、「サポートされる→そ

うしようかな、モデルの模倣」であり、保育者の行動は、「サポートされる→提案する、モデルを示す、活動の予測、誘導する」である。

1歳前半には、活発に体を動かし、盛んに“探索活動”を行う。また、特定の大人との愛着関係を基盤に、周りの人たちとのあたたかい交流を通して自我が芽生え、自己主張をするようになり、いわゆる“だだこね”が現れてくる。自分でやりたいことと、実際にはうまくいかないことから、保育者はモデルを示しながらサポートするような相補的關係は必要である。駄々をこねるが、一方では「しがみつきたくなるような」保育者との相補的關係が大切である。1歳後半には、さらに自分の思いを伝えたい欲求が高まり、指差し、片言、二語文を話し始め、対話が芽生える。気持ちの面でも切り替えができ、いったん尻込みした相手や恥ずかしいけれど気になる相手も受け入れるようになっていく。言語の発達には、保育者の応答性が重要である。子どもの話したい内的活動に気づき、言葉を添えていくような相補的關係が求められる。以下に示す項目を参考に考えてみる。

- ・粗大面：走る、登る、跳ぶ、くぐる、などの動きができるようになる。戸外に出ると、しゃがんで石や落ち葉を拾ったりする。
- ・微細面：指先を使って、ねじる、つまむ、ひねるなど手・指の細かい動きができるようになる。積み木を3つ以上積み上げたり、倒れても積み直したり、並べたりする。なぐり描きは、クレヨンやフェルトペンを持って描き始める。「マジックはこうしたらいいよ」、と技能的モデルを示したり、保育者が積み木を積んで遊ぶ姿をみることで子どもが真似をするように示したりするような相補的關係である。
- ・養護面：いすに座って食べ始める。スプーンやフォークをもって食べようと、苦手なものも励まされると食べようとする。排尿間隔が少し長くなり、生活の節目を目安にトイレトレーニングを始める。「オシッコでたね」と、言葉をかけると自分でもでたことを理解するようになる。衣類の着脱は脱ぐことから始め、補助されながら身につけていく。

「ジブンデ」の気持ちを尊重して保育者は見守りつつ補助する相補的關係が必要である。

相補的關係では、子どもの行動は、「対等な共同性→玩具でやりとりをする、はいどうぞ、まねっこをする」であり、保育者の行動は、「対等な共同性→環境を整える、遊び手として活動する、例示での誘導」である。

以下に示す項目を参考に考えてみる。

- ・まねっこ遊び：大人の生活を真似て、見立て、つもり遊びとして模倣する。「役割遊び」や「ごっこ遊び」へとつながる。保育者は子どものやろうとすることや好きな活動を、内的活動に気づくことが大切である。一緒に楽しむという相補的關係、やり取りをする応答的相補的關係が求められる。
- ・散歩：散歩を通して子どもは、見て、聞いて、触れて、においを嗅いで五感のすべてを使って周囲を感じる。思わず声や言葉がでることもある。保育者は、子どもと一緒に驚き、感動するような相補的關係である。
- ・指示行為：「あれ」「こっち」など自分の要求や興味を伝える応答行為が始まる。棚に置かれたおもちゃを指差したときには、「取って」という意味や「見つけた」という内的活動がある。子どもの内的活動をくみ取りながら、サポートする相補的關係である。子どもの気持ちをくみ取り「欲しいの」「見つけたね」と言葉におき換えて応える。子どもは、通じたことが嬉しいと「もっと伝えよう」とすることから情動交流は深まる。片言や二語文になり、話ができるようになると指差しは減少する。
- ・友だちを求める：保育士を介して一緒に遊び、好きな遊びをする子どもが近くで遊ぶことが多くなる。「一緒にいたいな」と思うとそばにちかづき、手をつなごうとするなど、関係ができる行為が現れてくる。見守られながら友だちとの関わりを広げる。
- ・かみつき：思うようにならず、言葉でうまく伝えられない。かんだり、たたいたり、押したり、引っかくなどのトラブルが発生する。

自我が出てくるが、「これが欲しかったの」と子どもの気持ちを代弁し、「かしてっていおう」と保育士が仲立ちとなるような「相補的關係」が必要である。

④2歳－2歳児クラス

相補的關係では、子どもの行動は、「分離的自主性→自分でしようとする、これなあに、みてみてという。」であり、保育者の行動は、「分離的自主性→見守る、確認する、共感する。」である。

1歳頃に覚えた歩行は、さらに活発になり、走ったり、跳んだりすることも好きになる。ボールを蹴ったり投げたり、段ボール箱などの中に入るなど、運動はいつそう活発になり、さまざまな姿勢をとりながら身体を使った遊びを繰り返し行う。自分の体を思うように動かし、生活のなかでの動きが活発になる。子どもが自分でしようとすることを見守ったり、確認したりするような相補的關係である。この時期は、指先の動きも器用になり、紙をちぎったり、破いたり、貼ったり、描画活動を

楽しみ、なぐり描きから、曲線や丸、波形など描けるようになる。クレヨンなどの持ち方も3本の指を使い大人と同じような持ち方に変わっていく。保育者の見守りという相補的關係が重要である。

生活面では、簡単な衣服を着脱するようになり、階段の上がり降りや、ドアの開閉、水道の蛇口の開け閉め、いすに座る、いすをひくなど、徐々にできるようになる。2歳になると発声が明瞭になり、自分のしたいこと、してほしいことを言葉で表現できるようになる。遊びの面では見立て遊びをするようになり、この遊びの中での言葉のやり取りが楽しくなる一方、自分の表現したい言葉が見つからないときにはかんしゃくを起こすこともある。2歳を過ぎる頃より、「これ、なに?」、「これは?」など、物の名称についての質問をするようになる。2歳後半頃からは、「わたしの」というように、多語文が出てくるようになる。また、「どうして?」「なぜ?」と理由を聞くことが増え、大人を困らせる。見立て遊びが活発に発展し、お店屋さんなどをして遊ぶ姿もみられる。身体のバランスもとれるようになり、三輪車に乗る、追いかけて遊びなど、全身を使った遊びが広がっていく。手遊びは聞いたり歌ったり、何度か聞くと覚えるようになる。

この時期は、言葉がはっきりし始める一方、自我が強くなっていく。指先の発達に伴い食事や衣服の着脱、排せつなど、生活に必要なことができるようになる。「自分で」「自分で!」と、生活や遊びの中で意欲が高まり、自己主張が目立ち、自己の意思をはっきりと表すようになる。思いどおりにならないと、泣いたり、かんしゃくを起こしたりする。子どもの心に葛藤が起こるが、子どもの気持ちを保育者が代弁するような相補的關係が大切である。2歳は平行遊びが多く、好きなことをして遊ぶ。仲良く順番に使うことなどはまだできないが保育者はお互いの気持ちを受容し、子どもが納得のいくように、根気よくほかの子どもとの関わり方を知らせていく。この頃から良いこと悪いことの区別や約束ごとを理解し始める。以上、3歳未満の発達の特徴を示したが、月案・週案では、いつも「次の月」や「次の週」の生活で大事にしたい具体的なねらい及び内容を立案することが大切である。反省評価の上にたった子どもの発達保障といえる。先に先に進めることが重要ではなく、振り返り、発達や経験の積み残しはないのかという確認やそのための内的活動への観察が必要である。すなわち、子どものなかに育つもの、育てたいものをねらいとして示すともいえる。内容は、あくまでもねらいを達成するためには、今までにどのような経験を積み重ねているかを具体的に見通すことである。この時期に発達として、「経

験する必要がある遊びや活動」は何かを考えることが保育者の役割である。そのためには、保育者は子どもに適切な環境を構成する必要がある。子どもの発達や要求に即してねらいや内容を達成するためには、物や人、時間、を工夫し、子どものやってみたいという「動機づけ」が保育者との気持ちよい関係、相補的關係によって育まれる。子どもが自分で行動できるような「環境を通しての保育」が相補的關係からも保育者には求められる。経験は、子ども自身が「やってみたい」と思える気持ちを起こさせる「環境」が大切である。保育者は子どもたちが活動したくなるような環境構成をいかにするか重要である。

以上の活動の内容は乳児保育の一面でしかない。乳児保育における保育者と子どもの関係性の面から検討してきた。乳児期はほとんどの生活行動は大人との依存関係が中心であるといわれてきた。確かに、食・睡眠・移動・排泄など多くの場合に大人に依存しているといわれる。このために、養護の活動が重要であるという指針の考え方が生まれてくるのである。しかし、それは果たして乳児の依存の状態を明らかにしたといえるのであろうか。少なくとも、未熟な状態で生まれた乳児であるが、周囲の大人を動かす能動的な力があり、さらには、乳児期の微笑みには大人をひきつける力があるとの視点が重要である。そして、大人は思わず乳児の微笑をみて微笑み、その微笑を見て乳児が笑いかける。以上のような相互作用が生まれることから、「相補的關係」を提案した。

おわりに

本論文は、博士論文で示した内容の一部を加筆修正したものである。様々な課題が残されている。ただ、緊急の課題として、乳児の保育内容編成が問われる時代となり、その理論と実践が問われているといえる。その切り口は、保育実践から学び、どのように理論構築するかである。子どもの姿をパッと見て、即座に「相補的關係」が構築できるような保育者の資質、同時に子どもの育ちをじっくりと考えて必要な「相補的關係」を構築できるような保育者の資質。乳児保育における保育者にはこの両方の指導法が必要といえる。

見えないものをみる力が重要だといわれる今日、特に、乳児の保育実践は、内面が見えにくいといわれてきた。実際には、乳児の保育実践において保育者は試行錯誤を繰り返している。あるベテランの保育者は経験と勘こそが大切ともいっている。しかしながら、経験と勘だけではなく、子どもに今何が育ちつつあるのかというエビデンスのある保育実践が求められる。まだまだ道半ば

であるが、乳児の保育実践への一助となることを祈念し、研究を継続していきたい。

文献

1. 阿部和子 1995 乳児保育：子どもの豊かな育ちを求めて 萌文書林
2. 阿部和子 2007 演習 乳児保育の基本 萌文書林
3. 阿部和子・大場幸夫 2002 乳児保育 ミネルヴァ書房
4. 阿部和子ほか 2009 乳児保育：子どもの豊かな育ちを求めて 萌文書林
5. 乾敏郎 2013 脳科学からみる子どもの心の育ち：認知発達のルーツをさぐる ミネルヴァ書房
6. 今井和子他 2010 独自性を活かした保育課程に基づく指導計画 ミネルヴァ書房
7. 遠藤利彦 2013 「情の理」論：情動の合理性をめぐる心理学的考究 東京大学出版会
8. 遠藤利彦 2012 甘えとアタッチメントー理論と臨床実践ー 遠見書房
9. 大方美香・小寺玲音・玉置哲淳 2013 保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討ー乳児保育研究その1ー 大阪総合保育大学紀要第7号 (67-94)
10. 大方美香 2016 保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討ー乳児保育研究その2ー 大阪総合保育大学紀要第10号 (15-30)
11. 大方美香 2017 保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討ー乳児保育研究その3ー 大阪総合保育大学紀要第11号 (27-40)
12. 大方美香 2018 乳児保育のカリキュラム編成の研究 ふくろう出版
13. 大阪総合保育大学総合保育研究所 幼保一体化プロジェクト 2018 幼稚園と保育所のいいところを見つめなおす ふくろう出版
14. 加藤敏子・富永由佳 2011 乳児保育：一人一人を大切に 萌文書林
15. 厚生労働省 2018 保育所保育指針 フレーベル館
16. 厚生労働省 2018 保育所保育指針解説書 フレーベル館
17. 小西行郎・遠藤利彦 2012 赤ちゃん学を学ぶ人のために 世界思想社
18. 榊原洋一 2006 今求められる質の高い乳児保育の実践と子育て支援 ミネルヴァ書房
19. 穴戸健夫 2010 保育カリキュラム（保育課程）について考える 23号 (1-8)
20. 柴崎正行 2010 年齢別クラス運営①0歳児のクラス運営 ひかりのくに株式会社
21. 柴崎正行 2010 年齢別クラス運営①1歳児のクラス運営 ひかりのくに株式会社
22. 柴崎正行 2001 新・保育講座⑤教育課程・保育計画総論 ミネルヴァ書房
23. 田中亨胤 1984 経験活動の視点から見た教育内容の変遷について（我が国の場合） 兵庫教育大学研究紀要 第4巻（第1分冊）177-189
24. 田中亨胤 1994 幼児教育カリキュラムの研究 日本教育研究センター
25. 田中亨胤 2010 幼児教育カリキュラム・シフトの位相とパラダイムー教授ー学習過程の可視化への試みー 京都文教短期大学研究紀要 49号 (60-66) 京都文教短期大学
26. 玉置哲淳 2002 新版幼児教育課程論入門 建帛社
27. 玉置哲淳 2008 指導計画の考え方とその編成方法 北大路書房
28. 玉置哲淳 2011 幼稚園におけるクラス経営論の課題と方向についての覚書ークラス経営の実証的研究序説ー 大阪総合保育大学紀要 第5号 (45-68)
29. 玉置哲淳 2010 乳児の人権保育実践展開の視点と目標 エデュケア 30号 (1-20) 大阪教育大学
30. 玉置哲淳 2010 乳児の人権保育シリーズ1 2歳児の人権保育 解放出版社
31. 吉本和子 2002 乳児保育：一人ひとりが大切に育てられるために エイデル研究所

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

《連絡先》

大方 美香
〒546-0013 大阪市東住吉区湯里6丁目4-26
大阪総合保育大学
E-mail : mika@jonan.ac.jp